

フィールド 便り

リレー連載

忘れられた当たり前を探す!

目からウロコのフィールドワーク④

ルワンダ農村の「日常」

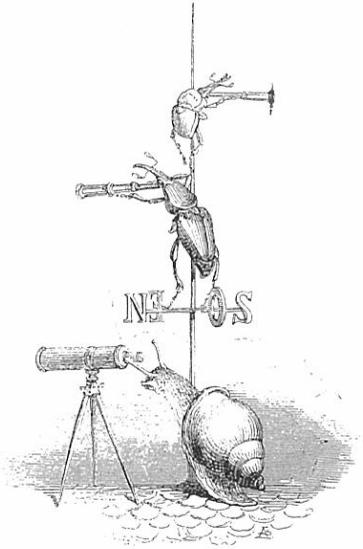
岩崎健幸

いわさき たけゆき

東京大学大学院農学生命科学研究科修士課程

(専門はルワンダ地域研究)

筆者の調査地、ルワンダ農村で電気があるのは、役場と保健センター、中学校、教会くらいであり、基本的に一



やラジオで十分だし、冷涼なルワンダでは冷暖房の必要もない。近年農村でも所有者が増えて来ている携帯電話も保健センターのおばちゃんにお願いして充電してもらうことができる。

携帯電話の充電には、天気への注意が必要だ。保健センターが太陽光発電のため、天気が悪いとなかなか充電することができないからだ。また、おばちゃんとの信頼関係も重要となってくる。筆者も滞在中は保健センターで充電させてもらっているが、当初は盗まれやしないか心配だった。

ある日、ホームステイ先の子に、日本の写真を見せて欲しいとお願いされた。「写真のデータが入ったノートパソコンはあるが、充電がないので写真を見せることはできない」と伝えたところ、彼女は「保健センターで充電すればいいじゃない」となんのためらいもなく答えた。これには少々面食らった。いつも携帯電話を預けていたおばちゃん

般の家庭にはない。といっても、そこでの生活が不便なわけではない。灯りはろうそくやランタン、情報は人づて



調査地の子どもたちと筆者。

んとはいえ、さすがにノートパソコンを預けるのはためらわれたのだ。返答に窮しながら、なんとか「盗まれたりしないかな？」と聞いてみると、「大丈夫よ！盗まれたりなんてしないわ！」

と自信満々の表情。結局、その自信に負けてノートパソコンの充電をお願いすることにいった。

翌日の晴れた朝、保健センターへ向かった。「これを充電してもらいたいのだけど……」と恐る恐るノートパソコンを出すと、おばちゃんは特に驚くこともなく預かってくれた。一抹の不安を感じながら保健センターを後にし、夕方に聞き取りを終えて帰路を急ぐ。

いつものようにドアをノックすると、そこにはいつもと変わらぬおばちゃんの顔と充電中のノートパソコン。いつもと同じように握手をしつつ「ムラコゼ！（ありがとう！）」とお礼を言いながらも、内心はほっと胸を撫で下ろした自分があり、なんだか少しもやもやとしたものが残った。

日本なら家から一歩も出ず、誰とも接することなくできることが、ルワンダ農村ではできない。携帯やパソコンの充電はもちろんのこと、料理はお隣

さんから火種をもらってやるし、夕方に水汲みに行けば近所の子どもたちが集まっているのだ。このように、ルワンダ農村では、日々の生活の中で人とのつながりが形づくられていく。そこでは、いいこともあれば悪いこともあり、便利なこともあれば面倒なこともある。一七年前のジェノサイド（大量虐殺）のち、自分の土地に戻った人びとは、こうした日々の中で少しずつ人とのつながりを（再）構築し、新しい「日常」をつくりだしてきたのだろう。

誰によってもたらされているのかわからない「便利さ」に充ち溢れ、それが当たり前になっていた日本での生活。東日本を襲った大震災は、私たちにさまざまなものを投げかけ、その生活のあり方を問いなおす必要を迫っているように思える。新しい「日常」に向けて、コンセントの先へと想像力を広げていくことも必要ではないだろうか。